

# 経営部門

岐阜県下呂市

佐古 保【肉用牛一貫経営】

肉質等級は最高位の A5 が 5 割以上  
- 牛に優しい一貫生産で高収益 -



佐古さんご夫妻

平成 18 年度（第 45 回）農林水産祭内閣総理大臣賞  
第 36 回日本農業賞大賞

佐古保さんの経営は、岐阜県の中東部、準内陸気候で山林が 9 割を占める下呂市に立地している。

経営主の保さんは、昭和 45 年に自宅で肥育経営（6 頭）を開始し、昭和 51 年に離農牛舎を農協から賃貸する形で現在地へ移転した。昭和 54 年には、繁殖牛 5 頭を導入し経営内一貫生産を開始し、段階的に増頭をおこない、平成 16 年現在、繁殖雌牛 72 頭、肥育牛 93 頭、育成牛他 62 頭の計 214 頭を飼養している。

経営の特徴をあげると、第 1 に狭小農地を有効活用した資源循環型の農業生産である。ほ場面積が狭小で散在する山間農地は、作業効率の悪さと生産性の低さのため、耕作放棄地になりやすいが、佐古さんは地域の畜産農家とともに収穫機械の導入や栽培給与方法の研究、電気牧柵を利用した鳥獣害防除技術の応用等によって、狭小な転作水田等を有効活用した飼料用トウモロコシ生産に取り組んでいる。飼料用トウモロコシは単収が多く、栄養分が豊富であるという優れた特性を持つ反面、栽培や給与に技術が必要であるが、佐古さんは試行錯誤の結果、省力的な栽培方法と周年サイレージ給与方法を確立している。

第 2 に高能力繁殖雌牛群の整備である。佐古さんは昭和 50 年代の子牛価格高騰時に、経営内一貫体制の重要性を認識し、農協の指導と国県等の補助事業の活用により繁殖雌牛の増頭を図った。繁殖雌牛は出荷時の産肉成績の把握、全国和牛登録協会の産肉性育種価解析を活用して、優秀な自家産雌牛を保留しており、平成 5 年以降は外部からの導入を行っていない。また、この取り組みによって肉質・種牛性ともに優秀な繁殖雌牛群が整備され、岐阜県有の「護熙王（BMS 育種価 1.82）」「福光王（BMS 育種価 2.48、岐阜県歴代 2 位）」「姫水晶（BMS 育種価 2.17、同 7 位）」などの優秀な種雄牛生産にもつなげている。

第 3 に一貫経営のメリットを生かした枝肉成績の向上である。枝肉成績に基づく交配計画を立てながら、向上させてきた結果、枝肉成績 5 等級率が 5 割以上と飛騨牛生産者の中でトップクラスの成績をあげている。

以上の取り組みにより、繁殖牛の平均分娩間隔 362 日、去勢牛平均 25.3 カ月の早い出荷月齢、5 等級率 51%（全国平均 14.2%）、4 等級率以上 82%、平均格付 4.2（全国平均 3.5）等の技術成績と、去勢肥育牛平均販売価格が 994 千円/頭を達成し、經常所得が 19,508 千円を確保している（数値は全て平成 16 年度、全国平均は日本食肉格付協会資料から）。

肉用牛経営の一貫化には、繁殖と肥育の双方の技術を習得する必要があること、資金が長期に滞留することから潤沢な運転資金が必要であることなど困難な点が指摘されるが、こうした点を乗り越えてきた佐古さんの経営は、今後の肉用牛一貫経営のモデルとなる事例である。

### 狭小な農地

山間部の狭小な農地を有効活用して飼料用トウモロコシを生産している。



### 鳥獣害対策

鳥獣被害が多い地域なので、水田・畑地は電牧やトタンで囲っている。



### 繁殖牛舎

6カ月齢まで子牛は母牛と同じ房で飼養し、ストレスをかけないようにしている。



### 繁殖雌牛

繁殖雌牛にはあまり肉を付けないように心がけている。



### たい肥舎

佐古さんが自力施工したたい肥舎。



### 増頭を計画中

繁殖牛100頭の増頭を計画しており、放牧地の一部を平坦化して自力施工で牛舎を建設中。

